

## 幼小連携のカリキュラムについての一考察

— 小学1年生の「体育」「音楽」の授業観察を通して —

白川 佳子 (初等教育学科・准教授)・東 ゆかり (初等教育学科・准教授)・  
西島 大祐 (初等教育学科・講師)・荒松 礼乃 (初等教育学科・講師)  
秋本 篤志・新井 孝昇・美甘 亜耶・伊藤 由美・栗原 由佳・吉田 彩花・上野 高裕  
(鎌倉女子大学初等部)

### A Study of the Curriculum in Preschool-Elementary School Cooperation: Investigation by observing the classes of 'Physical Education' and 'Music' for the 1st graders

Shirakawa, Yoshiko・Azuma, Yukari・Daisuke, Nishijima・Aramatsu, Ayano・  
Akimoto, Atsushi・Arai, Takanori・Mikamo, Aya・Ito, Yumi・Kurihara, Yuka・  
Yoshida, Saika・Ueno, Takahiro

#### Abstract

The purpose of this study is to investigate what puzzlement or stumbling the 1st graders of elementary school would feel. Then, we will discuss the consistent curriculum focusing on the encouragement of children's learning.

From the results of class observations and the class teachers' notice on their 1st graders' behaviors, it was revealed that the children felt various puzzlement or stumbling, although the teachers had already taken proper actions for it. However, since some of the children's problems (or "barriers") continue after the 1st term, it remained uncertain whether the problems were too hard for the children to overcome or solvable with the passage of time.

In the future, we will continue to explore if the children will be able to overcome the problems by observing their classes in the next term.

Key words: preschool-elementary school cooperation, class observation, curriculum

キーワード：幼小連携、授業観察、カリキュラム

#### 研究の目的

幼小連携の問題が注目されている背景には「小1プロブレム」の問題があげられる。小1プロブレムは、高学年に見られる学級崩壊とは異なり、

幼児期を引きずる子どもたちがパニックを起こしている状態だとされる(上野、2007)。幼稚園や保育所から進級してきた小学1年生が新しい環境に適応できない原因としては、幼稚園と小学校の

間に生じた「段差」と「連続」のつまずきがあるとも言われている。

国立教育研究所の調査報告によると、学級指導がうまくいかない理由の7割は教師の指導能力の不足が原因であるとする他、就学前教育との連携・教育が不足している事例が13%もあげられていたが、幼保・小など異校種連携を実施したことによって回復したという結果も報告されている。

このように、小学校入学後に起こる小1プロブレムなどから幼小連携または保小連携の必要性は近年高まってきており全国規模の実態調査がなされている。お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター（2003）が実施した全国調査では、幼小連携の実績は96.8%という高い割合であった。それに対して、保育所と小学校の連携は幼稚園に比べて遅れがみられるという現状がある。清水ら（2008）は、「育ち（発達）の連続性」という視点から、保育所と小学校がどのように連携していけばよいのかを検討することを目的とし、保育所保育指針と小学校学習指導要領との関係について調べ、保育所から小学校に送付する保育所版指導要録の作成を提案している。また、松壽ら（2008）は、保小連携の実態を調べるため保育所の全国調査を行った結果、68.2%が保小連携を実践していた。そして、保幼小連携を実施している場合は小学校が核となった連携が多く見られたと報告している。このような研究の背景には、平成20年版の保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂があり、保育所保育指針においては、保小の連携を推進して児童保育要録を小学校に送付することが明記された。また、幼稚園教育要領では、第3章「指導計画作成上の留意事項」「2.特に留意する事項」において、「(5)幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研修の機会を設けたりするなど、連携を図るようにする。」という内容が新たに追加された。一方、小学校学習指導要領においても、総則の中で幼稚園・保育所との連携を明記しており、国語、図画工作、音楽では幼児教育の成果を受けて低学年教育を行うことや生活科において幼

児と交流し、入学当初の合科・関連の指導を行うことが追加された。

このように、幼小連携および保幼小連携は幼稚園教育要領や学習指導要領の中で明記されている事柄であり、必ず実施していかなければならない事柄となったのである。

現在、幼小連携の取り組みは、保育者や教師間の交流や子ども同士の交流などさまざまなレベルで行われているが、小学1年生が入学間もない1学期当初の時期に学校生活に対してどのような適応状態にあるのか検討した研究は少ない。

そこで、本研究では、幼児期の「体育」「音楽」などの「楽しい学び」が、小学校の教科における「知的好奇心」としての学習に組み換えられるにはどのような方法や課題があるのかについて調査することを目的とし、小学1年生における「体育」「音楽」の授業における子どもたちの行動の観察を通して検討したい。さらに、幼小の接続期である小学校入学当初の児童の適応状況と教師の取り組みを明らかにすることによって、幼小連携における一貫したカリキュラムの開発について考察したい。

## 方 法

### 授業観察

観察者2名～4名が、私立K小学校の1年生の「体育」「音楽」の授業を、デジタルビデオ、デジタルカメラ、記録用紙を用いて観察記録を行う。授業以外の子どもたちの様子を知るために、「朝の会」の様子も3回観察を行う。観察者は、小学1年生の担任ではなく、本研究の幼児教育研究者である。観察の視点としては、授業の指導案にある授業のねらいと内容をもとに、子どもが授業に適応できているのか、そして、教師はそれらの子どもの行動にどのような対応をしているのかを観察するものである。

**観察対象：**鎌倉市の私立K小学校1年1組、1年3組

**観察実施日：**

- ①「体育」の授業観察 観察クラス：1年1組  
1回目：2008年5月13日（火）1校時

「おにあそび」

2回目：2008年6月17日（火）1校時

「リレーあそび」

3回目：2008年7月8日（火）1校時

「新体力テスト」

4回目：2008年7月15日（火）1・2校時

「みずあそび（着衣泳）」

## ②「音楽」の授業観察 観察クラス：1年3組

1回目：2008年5月12日（月）2校時

「まねっこあそび」

2回目：2008年6月17日（火）4校時

「りずむののってあそぼう」

3回目：2008年7月15日（火）4校時

「けんぱんはあもにか①」

## ③「朝の会」の観察 観察クラス：1年1組

1回目：2008年5月13日（火）8:30-8:50

2回目：2008年6月17日（火）8:30-8:50

3回目：2008年7月8日（火）8:30-8:50

## 結果と考察

### 1. 授業観察における子どもの行動記録

#### ①「体育」の授業観察 観察クラス：1年1組

1回目：2008年5月13日（火）1校時

「おにあそび」

- ・体育館への移動についてのルールは、教室を出る前に注意があったが、距離が長いので、スキップをしたり、廊下でおしゃべりしたり、列の間が開いてしまい移動中に指導を受けていた。
- ・右向け右の練習では、遅れてしまったり、他の子をまねている子などがいた。
- ・ラジオ体操では、体操の手が反対になったり、他の子を見て間違いに気づいて合わせたり、全く動きについていけない子がいた。全体的に体操の音楽には揃っていない。T1は次の活動の準備があり、T2が子どもたちの前で体操の見本を見せていたが、個別の関わりが必要な子どもが多いようである。
- ・6月中旬の運動会に向けて行進の練習をしたが、駆け足になってしまう子、足に意識が集中してしまい手をきちんと振ることができない子、笛の音で終了できない子がいた。

- ・体育館の鬼ごっこでは、線の上だけを走り、捕まったら、帽子の色を変えるというルールが、子どもたちには少し複雑だったかもしれないが、線の上を走り回るといった活動自体は子どもにとって楽しい活動のようであった。

2回目：2008年6月17日（火）1校時

「リレーあそび」

- ・運動場に移動する際、玄関で靴の履きかえをしていたが、座って履き替える子や立って履き替えることができる子など個人差があった。
- ・赤白組に分かれての動きに慣れてきている。
- ・ストレッチの際、「幼稚園と一緒にだ」という子がいた。アキレス腱を伸ばすときに後ろのかかとをつけていない子どもも多い。
- ・タッチゲームの際に、じゃんけんをして負けた子が勝った子を追いかけるのは、それぞれが違う動きになるので子どもたちにとって難しそうであった。
- ・リレーのグループの走り順を決める際に、誕生日順に並んだり、グループエンカウンター要素を取り入れてあった。
- ・リレーのリング状のバトンは、棒状のバトンよりも子ども同士で受け取る際に容易であるが、落としてしまったときには転がってしまうという難点があった。
- ・リレーで負けたチームのコーンの位置を前にずらしていたが、コーンの位置を前にずらしたチームも勝った時はとても喜んでいて。
- ・コーンの周りをまわって、コーンにタッチしてから帰ってくるというのを分かっていない子もいた。
- ・走っているときに転んだ子どもがいたが、教師は子ども自身が行動を起こすのを見守っていた。

3回目：2008年7月8日（火）1校時

「新体力テスト」

- ・玄関で靴に履き替える際に、立ったままかかとをトントンとして靴を履ける子どもが多くなっていた。
- ・先生のお手伝いをする女児が2、3名おり、教師のそばにいたい様子が窺えた。

- 整列もきちんとでき、まっすぐ立っていられるようになっていた。
- ストレッチの際に、足関節が固い子は屈伸でしゃがみきれない、伸脚の時に足首を曲げるのも難しい様子だった。アキレス腱伸ばしでは、どこを伸ばしているのかあいまいな子どもが多い。
- ジャンプや肩回しはとても楽しそうにしていた。特に、小さく、早く動きは子どもたちが好きな動きのようであった。
- 「ソフトボール投げ」では、野球投げのフォームができている男子が一人いた。男子の多くは体全体を使って投げており、女子はボールを地面に向かって投げている子や腕だけで投げている子が多かった。
- ボールを投げる際、円の中心から動かずに投げる子や助走をつけて円のぎりぎりまで投げる子などがおり、理解力や想像力などにも個人差があった。次に使うボールを反対の手に持って投げる子どもも数名いた。
- 「立幅跳び」は子どもにとっては初めての経験なのか、手の振りと足の踏み出しのタイミングが合っていなかった。

#### 4 回目：2008年7月15日（火）1・2 校時

##### 「みずあそび（着衣泳）」

- 教室において着替えや移動の説明は、教師が黒板に時計の絵を描き、「長い針が3になったら校内着に着替えること」やプールに持っていくものについての説明が書かれていた。
- 子どもたちは準備運動もかなり覚えて慣れてきている様子が窺えた。
- 水に入ったときの子どもたちの喜びは大きかった。男子が一人だけ水が嫌いなようで、教師が個別の対応をしていた。
- 「流れるプール作り」で歩くときに、泳いでいる子もおり、早く泳ぎたい気持ちが抑えられない。背泳ぎをしている子もいた。
- 見学の子どもたちも「流れるプール作り」の子どもたちとプールサイドでタッチをしていて、プールに対する興味関心は高いように感じた。また、見学の子どもたちも「ハピネス」を楽し

そうに踊っていた。

- 水泳後の服の絞りはジャージなど厚手の素材は難しいようであったが、友だちに手伝ってもらいながら絞っていた。

#### ②「音楽」の授業観察 観察クラス：1年3組

##### 1 回目：2008年5月12日（月）2 校時

##### 「まねっこあそび」

- 授業中に、T1が子どもたちに質問し、子どもたちが発言する機会が多い。その間、後ろを向く子、隣の子と遊ぶ子、落ち着きがない子など集中力を失ったり退屈している子どもの様子が見られた。その間、T2が机間巡視しながら子どもたちの姿勢を正したり、気になる子どもに声かけをしていた。
- 本時の单元である「まねっこあそび」の手遊びの際には、T1と子どもたちの一体感が感じられ、子どもたちもとても集中していた。
- 「まねっこあそび」の鈴を使った楽器遊びの際は、合図があるまで勝手に鳴らさないで静かに待っているというルールを全員の子どもたちが守っていた。
- 音楽室を退出する際には、静かに2列に並び、「失礼します」と挨拶をしており、ルールの習得ができていた。

##### 2 回目：2008年6月17日（火）4 校時

##### 「りずむにのってあそぼう」

- T1が「みんなだいすき」の歌詞を黒板に書いている間、集中力をなくした子どもがいた。やはり、自分たちの活動がなくて待っているだけという時間はじっとしていられない様子であった。しかし、「手をたたきましょう」では、立ち上がってT1の動作に合わせて歌う活動を大変喜んでやっていた。
- 「みんなだいすき」を歌った後、「2番はあるのですか？」と何度もこだわって質問している子、「手をたたきましょう」では「3番はないのですか？」と何度も質問する子がいた。
- 空チーム、海チームになって大きな声を競った際、子どもたちは一生懸命に大きな声を出して

いた。それはどなり声にもなっていたが、集中した活動であった。「ふりかえり」で1人の子が「声がどなっていた」という感想を言い、他の子どもたちも「いいです」と答えていた。

### 3回目：2008年7月15日（火）4校時

#### 「けんぱんはあもにか①」

- 授業の始めに、T1が教室の移動がよくできたと子どもたちを褒め、「3秒だけ喜びましょう」と言い、子どもたちは「当たり前です」と答えていたが嬉しそうだった。
- 「鍵盤ハーモニカ」では上のドと下のドが分からない子、運指がスピードについて行っていない子などがいた。それに対して、T1が黒板に書いた楽譜の中の音符記号を指摘する子どももいた。T1はその指摘に対して「よく知っているね」「2年生になったら習うからね」と発言をしっかりと受け止めていた。

### ③「朝の会」の観察 観察クラス：1年1組

#### 1回目：2008年5月13日（火）8:30-8:50

- 係からの連絡では、T1が「お知らせのある人はいますか？」と尋ねたが、子どもたちからはお知らせではなく質問があがり、今はお知らせの時間だからお尋ねは休み時間にしようという注意をした。
- 筆箱をランドセルの中に忘れた子、鉛筆を机から落とす子が数人、消しゴムを忘れた子などがいた。消しゴムを忘れた子に対しては、消しゴムを忘れたらどうなるのかについて考えさせるなど、T1が個別に対応していた。

#### 2回目：2008年6月17日（火）8:30-8:50

- 消しゴムを忘れた子には、まずよく探すように指導していた。筆箱（靴下も）を床に落としていて、取りに行く子には個別に話をしていた。
- 朝学習が終わって、机の上の消しゴムのカスをゴミ箱に捨てるルールは習得できている。
- 朝学習のプリントをする際に、手を上げる子どもが数名いたが、T1、T2は手を上げている

子どものところにはすぐには行かなかった。そのうち、手を下ろす子どももいた。

#### 3回目：2008年7月8日（火）8:30-8:50

- 教室に帽子が落ちていた。前回の観察では筆箱や靴下も落ちており、子どもたちの中には自分の物の管理がうまくできない子もいるようである。
- 朝学習の答えの下に定規を使ってアンダーラインを引く作業も身につけてきている。
- 朝学習の時に手を上げている子どもたちにT1、T2が個別に対応していた。

## 2. 授業観察を通しての気づき

### (1) 体育

体育の授業は2名の教師が担当し、ラジオ体操や行進などで左右の理解ができていない子どもには個別の指導をしていた。また、右向け右など難しい体育関連の言葉が出てくるものの、体育すわりのことを「足ガッチャン」など分かりやすい言葉で表現するなどの配慮がなされていた。しかしながら、小学校に入学してきたばかりの子どもたちにとっては、新しい体験ばかりで、とまどっている姿が多く見られた。

#### 子どもの「とまどい」の様子

- 体操の隊形に開く際に、どこに走ったらよいか分からない子どもが多く見られた。これについては、「体操の隊形に／（横向き）／開け」と行動を細かく分けるとわかりやすいのではないだろうか。
- ストレッチの際、アキレス腱を伸ばすときに後ろのかかとをつけていない子どもも多い。お手本を見せるときは横向きの方がわかりやすいと思われる。
- タッチゲームの際に、じゃんけんをして負けた子が勝った子を追いかけるのは、それぞれが違う動きになるので子どもたちにとって難しかったようである。じゃんけんの前に、赤組を白組が追いかけるようなタッチゲームを入れると子どもにとってわかりやすいかもしれない。

- ・リレーのリング状のバトンは、棒状のバトンよりも子ども同士で受け取る際に容易であるが、リングバトンを落として転がってしまい、バトンを拾いに行く子が多かった。
- ・「立幅跳び」は子どもにとっては初めての経験なのか、手の振りと足の踏み出しの協応性がまだ育っていないように感じた。

#### 授業中の教師の工夫

- ・リレーのグループの走り順を決める際に、誕生日順に並んだり、グループエンカウンター要素を取り入れており、子どもたちのコミュニケーションを促進するものとしてよいと思った。
- ・リレーで負けたチームのコーンの位置を前にずらすのは、「競争」ではなく「協力」という意識を重視して「幼児体育的な考え」であると感じた。コーンの位置をずらしたチームが勝った時の喜びの様子を見ていると、劣等感などは微塵も感じられず、負けた子たちのモチベーションを上げていると感じた。

## (2) 音楽

入学して約1ヶ月の子どもの中には、一定時間、静かに人の話を聞くことができない子もいる。T2が机間巡視しながら子どもたちの姿勢を正したり、気になる子どもに声かけをしていた。子ども自身が参加できる活動については集中力が高まるようであるが、一方向的に教師や他の子どもの発言を聞く際には集中力を失ってしまうようであった。

音楽の授業は、教室ではない音楽室で授業を行うため、教室間の移動のルールを習得することも、この時期の子どものための教育目標になっている。子どもたちは、音楽室を退出する際に、静かに2列に並び、「失礼します」と挨拶をしており、すでにルールの習得ができていた。また、まねっこあそびの鈴を使った楽器遊びの際は、合図があるまで勝手に鳴らさないで静かに待っているというルールを全員の子どもたちが守っていた。このように、合図があるまで楽器を鳴らさないことや静かに教室を移動するというルールが入学して約1

ヶ月ですでにできていることから「音楽」の授業以外でも一貫してルールの徹底がなされていることが窺えた。

授業中に集中力をなくして退屈している子どもたちの中には、幼稚園ですでもっと高度な音楽経験をしてきた子どもも含まれるのかもしれない。また、幼児期には教師が子ども一人ひとりに対して個別の関わりが多いため、この時期の子どもたちにとってはT2に個別に関わってもらうことで安心感を抱いている部分もあるのではないだろうか。

#### 子どもの「とまどい」の様子

授業中に関係のないことも含めて何度も何度も質問する子どもの姿が見られた。これは、幼児期に自分が尋ねたいと思ったことは何でも発言して、それが許容される環境にいたためであろうと考えられる。それぞれの質問に答えていたら授業が進まなくなってしまうという問題点もあるが、質問に答えてもらえなかった子どもは「今は質問する時間ではない」というルールを習得するか、または、「答えが気になって活動に集中できない」ということもあるかもしれない。授業の最後に手を上げている子が数名いたが、授業が終わってしまった。幼児期にはなかった「一斉終了」の経験であるが、子どもたちの中に「とまどい」は感じているかもしれない。

#### 授業中の教師の工夫

音楽の授業時間の中で、喜びの感情を表出する時間を設けることや鍵盤ハーモニカを1分間だけ自由に吹いていいという時間を設けたのは、幼児期の領域「表現」のねらいと対応しているので子どもがのびのびとした感情表現ができたのではないかと思う。

また、授業中に上の学年で習うような音楽知識を使って発言した子どもに対して、T1は「よく知っているね」とポジティブに受け止めていた。幼児期には子どもの発言すべてが保育者に受け止めてもらえる環境にあり、「〇〇は幼稚園ではまだ早い」ということはない。一方、小学校では教

科書にはまだ出てこないことを発言した際に、「それは今発言することではない」「教科書の単元の中にあること」だからという暗黙のルールが敷かれている場合もあるように思う。そのような新しいルールを学ぶことも時には大事であると思うが、幼児教育で既に獲得しているやり方を受け止めてもらいつつ修正していくという方法をとることができれば、子どもたちの「とまどい」も最小限に抑えられるのではないだろうか。このような意味でも、観察したエピソードのT1のポジティブな受け止め方は子どもの発達にそくしたものであると考えられる。

### (3) 朝の会

朝の会の「朝学習」の時間に、わからないときに手を上げている子どもが数名いた。観察していると、いつも同じ子どもたちが手を上げているようであった。T1、T2は手をあげている子どもたちのところにすぐに行くときもあれば、すぐには行かず、自分自身で考えさせるときもあった。手をあげている子どもたちの中には、自分で考えず、すぐに教師に依存的になってしまう子どももいるようであったが、しばらくすると手を下ろし自分自身で考え始める子どもたちもいた。幼児期には、子ども一人ひとりのつぶやきに耳を傾けて個別の対応がなされるため、手を上げてすぐ対応してもらえるという環境は子どもにとって安心感があるであろう。

### 3. 授業観察についての意見交換を通しての気づき

幼児期に培った子どもたちの「学びの芽生え」が、「接続期」である小学1年生の活動において、どのように移行しているのかについて授業観察者と1年担当者の意見交換の機会を持った。「接続期」における子どものつまづきやとまどいは、子どもが乗り越える力を獲得するための機会であるという捉え方もあるが、一方で、子どもが乗り越えられるようにするため幼児教育のやり方を取り入れるなどの取り組みも必要であろう。そして、意見交換を通して、小学1年生の授業担当者が、

幼児期までの子どもの「学びの芽生え」についての理解を深めたり、子ども観の捉え直しをしていく。また、授業観察者が、小学1年1学期の子どもの適応過程の実態を知ることにより、「学びの芽生え」を主軸とした幼小の一貫したカリキュラムとはどのようなものであるのかを検討した。実施時期は、2008年4月から7月までの期間に5回実施した。

#### 1) 小学1年生の生活全般について

- 初等部1年生は担任6名、音楽・読書・英語・体育の専科の先生で担当している。
- 入学後の1年生の生活では、約束事、連絡帳の提出、荷物の片付け、着替え、学校のルール（＝必ず守らなければならないこと）がきちんとできるようにすることを指導している。また、授業時間によって学習の時間が区切られていることが分かるように指導している。1年生の4月には小学校6年間を通して必要な多くの事柄を学ばなければならないが、このような学びがなければ快適な学校生活を送ることができない。
- 内部進学者は3分の1程度で、その他は外部の幼稚園や保育所から進学してくるのであるが、幼児期に学んだことを小学1年生の教育にどのように生かしていけばよいのかということを経験現場では考えているが、現在のところ幼児期に子どもたちがどのようなことを学んだのかということを知る機会がない。
- 担任として1年生と接する際に気をつけていることは、友だち言葉の子どもが多いので友だち感覚にならないようにすることである。

#### 2) 体育の授業について

- 「体育」の授業では、列の作り方、歩き方、力だめしの運動、手押し車、右向け右などを行っているが、幼稚園とのギャップが子どもたちにあるのではないかと感じる。
- 「体育」の授業の際、体育館への移動については、1年生の間は教室から並んで移動し、2、3年になると体育館で現地集合となる。
- 体育館でも運動場でも集合の合図をするまでは

自由に走り回ることを認めている。他の学年でも同じである。

- 運動会が6月中旬にあるので、並ぶことに力を入れている。出席番号順、背の順、赤白組、並びっこなどを取り入れている。幼稚園ではどのような並び方をしていたのかを知ることが必要であると感じる。
- 「体育」の授業で四列縦隊をしたが、まだ理解していない子どもがいる。
- 5/13の「体育」の授業で、体育館での鬼ごっこは初めてだった。狭い場所での鬼ごっこや走らない鬼ごっこをすることもある。
- 「体育」でのT2の役割は、話を聞いていない子どもに関わったり運動面の補助などである。
- 「体育」で子どもたちが初めて体操を学ぶときにはどのように教えたらよいのかを知りたいと考えている。
- 「体育」では前にならぬ時に、前の子にくっついたり、広い場所に行くとき走り出す、まっすぐ並べない、右向け右がすぐできない、きちんと話を聞くことができないなど入学当初から個人差がある。

### 3) 音楽の授業について

- 音楽専科は1年担任にはいないため、音楽専科の先生が担当している。
- 「音楽」の授業はアイスブレイキングの時間として位置づけている。楽しむこと、リズム、歌遊び、「ひらいたひらいた」を輪になって歌うなどを行っている。授業のルールを教えている。例えば、挨拶の仕方、歌うときは足を肩幅を開くこと、音楽室では机の上の譜面台を触らない、音楽バッグを持って来るなど。「音楽」の授業は、音楽室で行い、教室移動の仕方も教えるため、正味30分くらいの授業になる。授業の流れは、子どもたちがよく知っている歌から教科書の歌へと展開していく。
- 「音楽」では初めて教える歌はどのように教えたらよいのか。
- 教えたいことを伝えるのではなく、子どもの発言を活動に活かしていくことを心がけている。

子どもの関心を引き出しみんなで共有することも取り入れている。

- 音楽的なものが苦手な子どもにも発言する機会を与えるように工夫しているが、結果的には音楽が好きな子どもが発言することが多い。
- 音楽室への移動の際は静かに並んで歩くというルールがあるが、子どもたちはルールを守ったことを褒められたいと思っており、褒められることで喜びを感じたり、楽しんでゲーム感覚でルールを守っているようである。

## 4. 担任からみた小学1年生の4月下旬までの「つまずき」や「とまどい」と教師の取り組み

小学1年生の担任全員が「学校全般における入学直後の子どもたちのつまずきやとまどい」「授業中における入学直後の子どものつまずきやとまどい」とそれらに対する自分自身の取り組みを項目ごとに書き出したものを本研究の幼児教育研究者が項目ごとに分類した。さらに、分類したものを小学校1年生の担任にフィードバックして修正作業を行ったところ、以下に示すように、1) 学校全般における「つまずき」や「とまどい」では、①登下校、②身の回りの整理整頓、③休憩時間の過ごし方、④友人関係、⑤空間認識、⑥コミュニケーション、⑦活動場所に分類された。また、2) 授業中の「つまずき」や「とまどい」については、①トイレに行くこと、②言葉づかい、③発表、④学習面に分類された。

### 1) 学校の生活全般における「つまずき」や「とまどい」

#### ①登下校

一人で登下校すること。

#### 【教師の取り組み】

下校の際には、担任がバス停まで一緒について行ったり、連絡帳で保護者と確認をする。

#### ②身の回りの整理整頓

身の回りの整理整頓に関して、ロッカーや自分の机に何を入れなければならないのか、下足や上履きなどの袋を使い分けて所定の場所に置くこと、



連絡帳やプリント類の提出物の提出を習慣化すること。

#### 【教師の取り組み】

担任が児童が登校する前に教室に行っておき指示を出す。

#### ③休憩時間の過ごし方

- ・休憩時間に次の授業の準備をしたりトイレなどに行っておくことなどが理解できていないため、自分の席に座ったままの児童が多い。
- ・着替え、トイレ、授業の準備、お茶を飲むことなどにどのように時間配分をすればよいのかわからない。
- ・お弁当を食べ終わるとお弁当を見せに来たり、トイレに行ってもいいですかと聞きにくるなど確認をとらないと不安な様子がある。

#### 【教師の取り組み】

休憩時間の過ごし方については、授業時間と休憩時間の区別がついていない児童が多いため、一緒に校内めぐりに行き説明をしたり、時計を常に見えるところに置いておき時間を意識させたり、黒板に具体的な指示を書いておくようにしている。また、時計を活用して長い針が〇までにと具体的に指示を出す。

#### ④友人関係

友人関係に関しては、幼稚園の時に周囲から頼りにされてよく声をかけられていた子どもにも不安を感じる傾向があるようである。自分から周りの子に声をかける方法を知らないからかもしれない。

#### 【教師の取り組み】

なかなか友人関係になじんでいけない子どもに対しては、教師と一緒に遊びながら子どもたちの遊びを仲介していく。

#### ⑤空間認識

列に等間隔で並ぶということができない子どもが多い（1年生に限ったことではない）。近くに人がいても手を振り回したり走るなどして注意を受けることがある。

#### 【教師の取り組み】

列に落ち着いて並べない子どもに対しては、繰

り返し練習をさせているが、学校に慣れるにつれて落ち着きがなくなっていく傾向がある。

#### ⑥コミュニケーション

- ・自分の言いたいことがうまく言えず、つい相手に手を出してしまう。自分ができていないにも関わらず、周りの子どもできていないことを指摘する。
- ・忘れ物をしたり何をすればよいか分からないとき、自分で言うことができない。

#### 【教師の取り組み】

- ・他の子どもに〇〇されたという苦情を言う子どもに対しては話を聞くことで満足し落ち着くことが多い。
- ・自分でやった失敗は必ず担任に報告に来させて次にどうすればよいのかも考えて言葉で言うように指導している。
- ・人のやった良いことを言わせて、そのことについては両者を褒めるようにしている。

#### ⑦活動場所

自分の教室が学校のどのあたりにあるのかわからない子どもがいる。正門、玄関、教室、トイレが児童の活動領域であり、それ以外は一人で行けない。

#### 【教師の取り組み】

教室などの場所が分からない子どもたちがいることに関しては、生活科の「がっこうたんけん」で教室やグラウンドに行き、学校の大きな地図を作成して教室に掲示している。

#### 2) 授業中の「つまずき」や「とまどい」について

##### ①トイレに行くこと

自分からトイレに行きたいと伝えられない。

#### 【教師の取り組み】

自分からトイレに行きたいと言えない子どももいるので、教師からトイレに行きたい者はいないか尋ねる。

##### ②言葉づかい

まだ敬語を使えない児童がいる。

#### 【教師の取り組み】

敬語が使えない子どもに対しては、言い直させたり、授業中に教師が「です・ます」を使うようにして見本を見せている。

### ③発表

- ・学習の場において、挙手をして意見を述べるという習慣がない。
- ・疑問があると、どんな場面でもすぐ声を発してしまう。
- ・人前に立って一人で発表するということが難しいようで、「忘れました」という子どもが多い。

#### 【教師の取り組み】

- ・挙手については、「はい」は1回であること、手をきちんと上げること、人の意見を最後まで聞いてから手を上げることなど最初に子どもたちにルールを伝える。
- ・人前で立って発表することが難しい子どもに対しては、朝の会、帰りの会、日直の仕事などを通して人前で話す機会を設ける。

### ④学習面

- ・鉛筆を使って書くことは基本的にできないので、ゆっくりと丁寧に書くというのはさらに困難なことである。
- ・教科書の〇〇ページを開けるという指示を出してもどこかわからない。
- ・ノートを使うことができない。
- ・机の上を片付けて活動しやすくしようとするのはしない。
- ・複数の指示が聞けないため、手順や手続きが考えられない。
- ・「～してもよい」というあいまいな指示だと、どうすればよいかわからない児童が多い。

- ・人の話をじっと聞くことや単に待つだけの行為ができない。
- ・机ではなく、床で着替えや支度などの作業をする子どもがいる。

#### 【教師の取り組み】

- ・教科書のページがわからない子どもに対しては個別指導をするようにする。
- ・ノートの使い方が分からない子どもに対しては黒板に使い方が分かるように分かりやすく書く。
- ・机の上を片付けない子どもに対しては、整頓ができるまで活動を開始しない。
- ・複数の指示を理解できない子どもに対して、スモールステップで明確に指示を出したり、質問を聞く時間をとるようにしている。

## 5. 「幼稚園教育要領のねらい」と「小学1年で身につけさせたいこと」の関連

表1には、幼稚園教育要領のねらいを領域ごとに示しており、表2には、「生活」「体育」「音楽」において、K小学校の1年生で身につけさせたい力を示している。幼稚園教育要領の領域と小学校の教科のつながりにおいては、「健康」と「体育」、「表現」と「音楽」「図工」、「環境」と「算数」「生活」、「言葉」と「国語」、「人間関係」と「生活」「道徳」「特別活動」がそれぞれ対応していると考えられるが、その内容はかなりの隔たりがあるようである。そのため、小学校入学当初の子どもたちは、前述したように、さまざまな「つまずき」や「とまどい」を感じており、教師は子どもにとってどのようなことが「つまずき」やすいのかを理解して対応することが必要であろう。

表1 幼稚園教育要領（平成20年版）のねらい

領域	ねらい
健康	①明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 ②自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 ③健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。
人間関係	①幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 ②身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。 ③社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

環境	①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。 ②身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 ③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
言葉	①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。 ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。 ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。
表現	①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

表2 教科別の1年生で身につけさせたい力 (K小学校)

教科	1年生で身につけさせたい力
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字を丁寧に書くことができる。</li> <li>長音・拗音・促音・発音、「は」「を」「へ」を正しく表記することができる。</li> <li>場面の様子を豊かに想像しながら読むことができる (文学的文章)。</li> <li>経験したことを、事柄の順序に気をつけて話すことができる。</li> <li>話の大事なことを落とさないように聞くことができる。</li> <li>経験したことについて、順序がわかるように、文のつながりに気をつけて書くことができる。</li> <li>原稿用紙を正しく使うことができる。</li> <li>楽しんで読書しようとする態度を身につける。</li> </ul>
算数	<ul style="list-style-type: none"> <li>100までの数の意味や数え方、表し方を理解し、数の大小・多少・数の構成・数の相対的見方などの「数概念」について知る。</li> <li>(一位数) + (一位数) の繰り上がりのない足し算と繰り上がりのある足し算、(一位数) - (一位数) の繰り下がりのない引き算と繰り下がりのある引き算の基礎・基本を身につける。</li> <li>筆算について知り、(一、二位数) + (一、二位数)、(二位数) - (一、二位数) の筆算の基礎を身につける。</li> <li>身近なものの長さを直接比べたり、いくつ分という言い方で表し、長さの概念を理解する。</li> <li>水のかさを同じ容器に入れて比べたり、コップ何杯分という言い方で表し、かさの概念を理解する。</li> </ul>
生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校内の教室や施設の場所を知り、より学校生活を楽しく過ごすことができるようにする。</li> <li>初等部の先生や上級生と関わりをもち、自分の生活をより豊かにすることができるようにする。アサガオを育てたり、観察したりして、親しみがもてるようにする。</li> <li>自分の成長をふりかえり、家族や友達に感謝の念をもつことができるようにする。</li> </ul>
図工	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な材料を用い、楽しんで造形活動ができる。</li> <li>手を動かし、基本的な道具を正しく扱うことができる。</li> <li>自分の感覚や行為を通じて、色や形の感じに気が付く。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の作品や友達の作品の良さに気付く。</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的なリズムの活動を通して、音楽を楽しむことができる。</li> <li>・音楽の楽しさを感じ取って聴き、音楽に親しむことができる。</li> <li>・範唱や範奏を聴いて歌うことができる。</li> <li>・基本的な演奏法で鍵盤ハーモニカを演奏できるようにする。</li> </ul>
体育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団行動で基本となる整列や隊形の仕方を身につける。</li> <li>・健康・安全に留意して、ルールを守って楽しく体を動かす。</li> <li>・縄跳び・ボールなどの器具、鉄棒やマット、跳び箱などの器械を通して、体の動かし方や自分の体を支える力を身につける。</li> <li>・水中じゃんけん、石拾いなどの遊びを通して、水に慣れる。</li> </ul>
道徳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初等部でのやくそくごとを知り、よりよい学校生活を送ることができるようにする。</li> </ul>
特別活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの生活をふりかえり、よりよい生活をおくることができるようにするために、人との話し合い活動を行うことができるようにする。</li> <li>・よりよい学級生活をおくことができるように、一人ひとりが仕事を分担し取り組むことができるようにする。</li> </ul>

### 全体的考察

幼稚園では休み時間という発想はなく、子どもたちの活動の展開を見ながら保育者が関わっていくが、小学校では授業時間と休み時間があり、授業では教材、学習材への教師の解釈、学問原理とのつながり、ねらいが強く問われ、これらの違いは、教師の子どもの見方やかかわり方という心理的な面や行動面にも違いを生み出す(秋田、2002)。確かに子どもにとっては、この文化の違いが大きな「段差」になっているのではないかという指摘もある。子どもにとって「段差」はとまどいを生じることもあるが、小学校のルールを習得していく貴重な経験の場でもある。大事なのは、小学校の教師が幼児期までの子どもたちの学びや生活を知り、小学校でどのようなことに「とまどい」を感じているのかということを理解した上で、子どもに関わっていくということではないだろうか。その中で、子どもにとって乗り越えることができないほど高い段差を滑らかにすることや、子ども自身がその段差を乗り越えていくだけの力や基礎力を培うための教育が求められている。

本研究では、入学まもない小学1年生の「体育」「音楽」「朝の会」の授業観察を通して、子どもの「つまずき」や「とまどい」はどのようなものであるのかを明らかにし、小学1年の担任との意見

交換を通してフィードバックを行い、幼児期から児童期への発達の接続期としての子どもの見方の捉え直しをした。また、1年担任から見た入学まもない子どもたちの「つまずき」や「とまどい」を学校生活全般と授業中に分類し、それらに教師がどのように対応しているのかをまとめてみた。前述したように、表2に示した「1年生で身につけさせたい力」は幼稚園教育要領の5領域のねらいとは大きな隔たりがあると思われるが、実際の教育現場では子どもたちの「つまずき」や「とまどい」に気づき、それぞれへの対応がなされていた。しかしながら、子どもたちの「つまずき」や「とまどい」は一学期終了後も続いているものもあり、これらは子どもたちにとって高すぎる「段差」なのかもしれない。

今後の課題としては、小学1年生への授業観察を続けて、子どもの「つまずき」や「とまどい」がどのように変化するのかを観察していきたい。また、小学1年担任が入学直後の子どもたちの「つまずき」や「とまどい」に対して理解が深まるような資料を提供していきたいと考えている。

### 引用文献

秋田喜代美 2002 幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例 小学館

- 国立教育研究所の学級経営委員会 2000 学級経営をめぐる問題の現状とその対応 学級経営の充実に関する調査研究最終報告書
- 松壽洋子（主任研究者）2008 保育所と小学校の連携のあり方に関する調査研究 平成19年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 財団法人こども未来財団（平成20年2月）
- お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター 2003 幼児教育と小学校教育をつなぐ幼小連携の現状と課題 子ども発達教育研究センター報告書
- 清水益治（主任研究者）2008 保育所と小学校の連携のあり方に関する調査研究 平成19年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 財団法人こども未来財団（平成20年2月）
- 上野ひろ美 2007 保幼小連携の課題に関する考察 奈良教育大学教育実践センター 研究紀要第16号、109-121.

## 要旨

本研究では、入学まもない小学1年生の「体育」「音楽」の授業観察や担任による子どもの行動への気づきを通して、子どもたちの「とまどい」や「つまずき」はどのようなものがあるのかを明らかにし、学びの芽生えの軸における一貫したカリキュラムについて検討するものである。

授業観察の結果や、担任による子どもの行動への気づきから、様々な子どもの「とまどい」や「つまずき」があることが明らかになったが、教師はすでに適切な取り組みをしていた。しかしながら、それらの子どもたちの「つまずき」は1学期が終わっても、そのまま継続しているものもあるため、子どもにとって高すぎる「段差」であるのか、それとも、時間が経てば乗り越えられるのかどうかは明らかではない。

今後も授業観察を通して、子どもたちがその「段差」を乗り越えていけるのかどうか、さらには、幼児期の体育・音楽などの楽しい遊びが小学校の教科における知的好奇心として学習に組み替えられるにはどのような課題があるのかについて検討していきたいと考えている。

（2008.10.23受稿）